

広西大学に 日本語講師として招かれる

～気持の優しい真面目な学生たち～



松岡 純子 (三十歳) 熊本市

昨年二月から一年間、広西大学で日本語を教え、今年一月帰国

上海空港に降り立ったのは、昨年二月九日のことでした。本田眺美さん(熊本市)と二人で広西壮族自治区の区都・南寧に着いたのは、その三日後、春節の前日、爆竹の音と人々のエネルギーが街中にあふれ、中国滞在の幕あけを告げてくれるようでした。私たちは、広西大学で日本語を教え、学内の教員宿舎で生活しました。

まず、大学の広さと豊かな緑と池に嘆声をあげ、熱帯果樹の並木をぬける正門から宿舎までの道のりに自転車が必要な痛感したのです。大学といっても、「研究教育機関プラス一大公園プラス一大居住区」を併せもつのが、日本との大きな違いでした。

お別れ旅行で、
アメリカ人講師(中央)と



た。学生約三千人は全員寮に入り、教職員千七百人も家族ぐるみ学内に住んでいます。敷地内には、職員の子供たちのための付設保育園、小中学校もあり、職住同域なのです。日本という大学の施設以外に百貨商店、新華書店、小さいながらも銀行、郵便局、理髪店や大映画場があり、住居部では朝市がたち、裏手には鶏やアヒルが放たれ、校舎に行く十字路ではアイスクリームや西瓜が売っています。大学と人々の日常生活がピッタリ重なり合っているのです。街に出かけなくても、学内で充分暮らせます。大学自体が、生活の場をかかえこんだ一共同体なのです。

授業は、留学生派遣訓練センターと外国語学部の二ヶ所でもちました。学生は、とにかく日本語で話そうという意欲が高く、食堂で輪になって話したり、散歩しながらおしゃべりしたり、夜間に客間を開放し、会話練習もしました。午前中四時間の授業が終わると、午後は原則として自習で、学生は思い思いに教室や木陰で勉強していました。昼休みは約三時間。子供たちや先生方が昼食に家に帰られますし、食後は昼寝をするのが習慣でした。南寧は北回帰線よりやや赤道寄り、五月頃から暑くなり、七月は炎暑、日中は三十八度くらいになります。街で買物中にメモをしようとしてボールペンを出したら、インクが流れだしていたことがあり



大学運動会

ました。肌
が塩っぽくなることも

だからこそ、昼寝をたっぷりとするのは身体のための大事な習慣なのです。一転して、南の空に大きくさそり座が輝く夜には、学生は教室に行き、十一時頃まで勉強していました。

ところで、冬になって知ったのは寮の前の夜店が出るという。勉強帰りの学生相手の屋台で、小籠包や団圓、米粉などを売っていました。電球の明かりの下で、学生といっしょにパクついた包子の味は忘れられません。

そのほか、朝のラジオ体操、ジョギング、夕方のスポーツタイムと学科対抗試合、週末の映画、バスハイクに野外炊きなど、体もしつかり動かし、バランスのとれた生活を送っていたこと、学生に無制限な飲酒喫煙者がいないことも特筆すべきでしょう。気持ちの優しい真面目な学

生たちでした。困ったことといえば、自転車です。右側通行なのに、習慣で左寄りに走り、前方から来る自転車とぶつかりそうになっては胆を冷やし、汗をかいて謝るといった具合でした。すっかり右側通行に慣れて日本に帰り、今度は左側通行なのに右寄りに走りそうに困ります。でも、これもなつかしいおみやげです。

今、センターの学生は日本留学を果たし、各地で勉強中、学部学生は七月の卒業に向けて論文を書いている頃です。広西でお会いしたたくさんの方々から感謝するとともに、交流、友情がより深く広く確かなものとなるよう念じています。



広西壮族自治区

情報が死命を制す。

同仁化学研究所専務
上野景右



我が社の技術陣に活力を与える重要なファクターとなっている。

先端技術産業にとって最も重要なものは、優秀な人材、ライバルの存在とともに、豊富な情報である。

特に、技術開発競争において死命を制するのは情報収集力である。日本の試薬メーカーのほとんどが、東京、大阪に集中しているなか、我が社はさきわめて例外的に、九州、しかも熊本という地方都市に会社の全機能を所在させている。この地において我が社が収集しうる情報は、定期的に日本中を飛び回っている技術宮

「試薬」という言葉は一般にはなじみの薄い言葉であるから、御存知ない人が多いと思う。簡単にいうと、飲み薬とか塗り薬のように病院や薬局で手に入る薬ではなくて、大学の実験室や企業の研究所等で研究に用いられる薬品のことである。

この「試薬」業界において、我が社が取り扱っているようなライフサイエンス研究用試薬市場は、輸入品よりも米国内メーカーが非常に強い。したがって、開発競争相手は主に外国メーカーであり、技術開発力によってのみ対抗するしか方法はない。しかし、見方を変えれば、外国メーカーという競争相手の存在こそが、

業部員からの報告、各種専門雑誌の購読によるものほか、米国のデータバンクの衛星通信によってオンラインで得られる情報、更には年に一、二度外国へ出掛けて集めてくる生の情報等である。しかしながら、これらの情報は決して満足できないのが現状である。

高速交通手段の発達により、日本地図、世界地図が時間的に縮小してしまっただけで、東京と大阪の間での情報量の差は百倍であると言われる。したがって、東京と熊本の情報量の差がどれほど大きいか容易に想像できる。

現在、熊本県では、テクノポリス



の地域指定を受け、官民一体となった取り組みが進められるいるが、これを機にもっともって熊本の技術と情報の集積が高まり、世界を相手にした企業活動が展開できるような環境づくりが進んでほしいと思う。

略歴

- 昭和47年 九州大学理学部卒業
- 同仁化学研究所入社
- 米田・テキサスA&M
- 大学に留学
- 博士号取得
- 昭和51年 博士号取得
- 昭和57年 同社専務就任

